

## 大正から昭和にかけての建築家の言説 その6

## 建築家ごとにみる主要テーマの変遷

正会員 ○ 近藤 正一 \*1  
同 日置 英貴 \*2  
同 姜 涌 \*3  
同 若山 滋 \*4

## 1. はじめに

大正から昭和中期は、明治期に西洋より学んだ様式建築からの脱却を目指し、日本独自のスタイルの創造を求め、建築とは何かと問い続けるいわば模索の時代であった。建築家は、作品と同時に評論において多様かつ自由な思考を表現し、その中で建築という概念とその意味、自身の有り様を問うており、当時の建築家の問題意識を潮流として捉えることは即ち建築という概念の生い立ちを把握することにつながる。本研究では大正から昭和中期にかけて建築雑誌の中に表現された言説を建築家ごとに分析、考察することで、建築家の問題意識を捉え、建築を巡る概念の変遷を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究対象

対象期間は建築家がジャーナリズムにおいて活発に評論を著し始める1913(大正2)年から、戦後日本の新しいモダニズム建築への議論が高まる1955(昭和30)年とする。対象文献は、当時を代表する建築雑誌であり、盛んに建築家による主張が提示された、『建築世界』・『建築雑誌』・『建築と社会』・『新建築』・『建築文化』・『国際建築』とする。対象とする建築家は、参考文献『新建築1981 12月臨時増刊 日本の建築家』・『日本近代建築史再考—虚構の崩壊—』に掲載された建築家、および対象文献において活発な言論活動を複数年にわたって展開し、建築論に変遷が見られ、かつ代表的とされる建築作品を残している建築家51人とする。

## 3. 研究方法

- 1) 対象文献に寄稿された評論の中から建築家の建築観が明確にあらわれている言説を抽出する。
- 2) 対象評論から建築家の建築的概念、思考が特にあらわれているセンテンスを抽出する。
- 3) 抽出したセンテンスの内容から、提示されている概念や意識を明確にし、建築家ごとに主要テーマの経年的推移を明らかにする(図-1)。
- 4) 建築家の世代を越えて、その概念および意識の相対的な変遷を明らかにする。

## 4. 考察

1910年代から1920年代にかけて、都市、住宅問題を社会問題として捉え、建築で解決しようとする思考が現

れ、また耐火耐震や構造、生活、経済に意識を向ける傾向がみられる。一方で、建築の概念や意味を芸術に求め、過去の様式を払拭し、オリジナルスタイルの確立を目指す評論も多く、日本の建築論の焦点は装飾から空間へと変化する。この時期はさまざまな見解が表明され、建築の意味や概念の範囲が拡大された時代といえる。

1930年代に入ると西洋でインターナショナルスタイルが生み出され、それを新しい建築の概念への回答と捉える建築家が現れる。当時、新しいスタイルとして、機能と意匠、構造の統合が目指され、また建築的要求が工業化、技術化、経済化にあったことから、問題意識は機械的機能主義へと一気に移行する。それが具体的に「最小限住宅」や「アパートメントハウス」という新しい住宅に対して求められたことは、当時の社会状況を反映した結果ではあるが、具体性を求めるあまり、そこに意味、概念を問うことが少なくなり、創作の試行を妨げ、建築家の思考を形式化させたともいえる。

1940年代、言語活動は政治性、社会性の影響からファシズム、大東亜理念を掲げ、日本伝統精神を尊重するが、結果として建築を文化と捉えつつ国益主義に誘導させる結果を招く。

再び新しい創造に目を向けた戦後は、過去を反省しつつ機械的機能主義を踏襲し、建築家独自の設計論や計画論が具体的に論じられ、建築観が多様化し、日本の新たなモダニズムの創造へと意識が向けられていく。

## 5. まとめ

総じて、大正から昭和にかけて論じられた主要なテーマは、一見多様であるが、「都市・防災政策」「社会生活」「材料・構造」「モダンデザイン」「ファシズム・大東亜理念」「建築設計計画」「建築歌論」「芸術論」「様式論」「文化・思想・理論」「海外」に分類することができる。

建築を巡る概念は、1910年代から1920年代にかけて急速に多様化し、1930年代に具体的思考へいったん収束した後、戦後機械的機能主義から様々な具体的議論が派生する。一般に戦時中の言語活動は、政治性によって強く支配されているとはいえ、結果的には、戦後の主題につながる話題が収斂され準備された時期といえる。

Discours of architects from the period of Taisho to Showa part 6  
Changes of each of architects' main themes

KONDO Shoichi, HIOKI Hideki, JIANG Yong and WAKAYAMA Shigeru

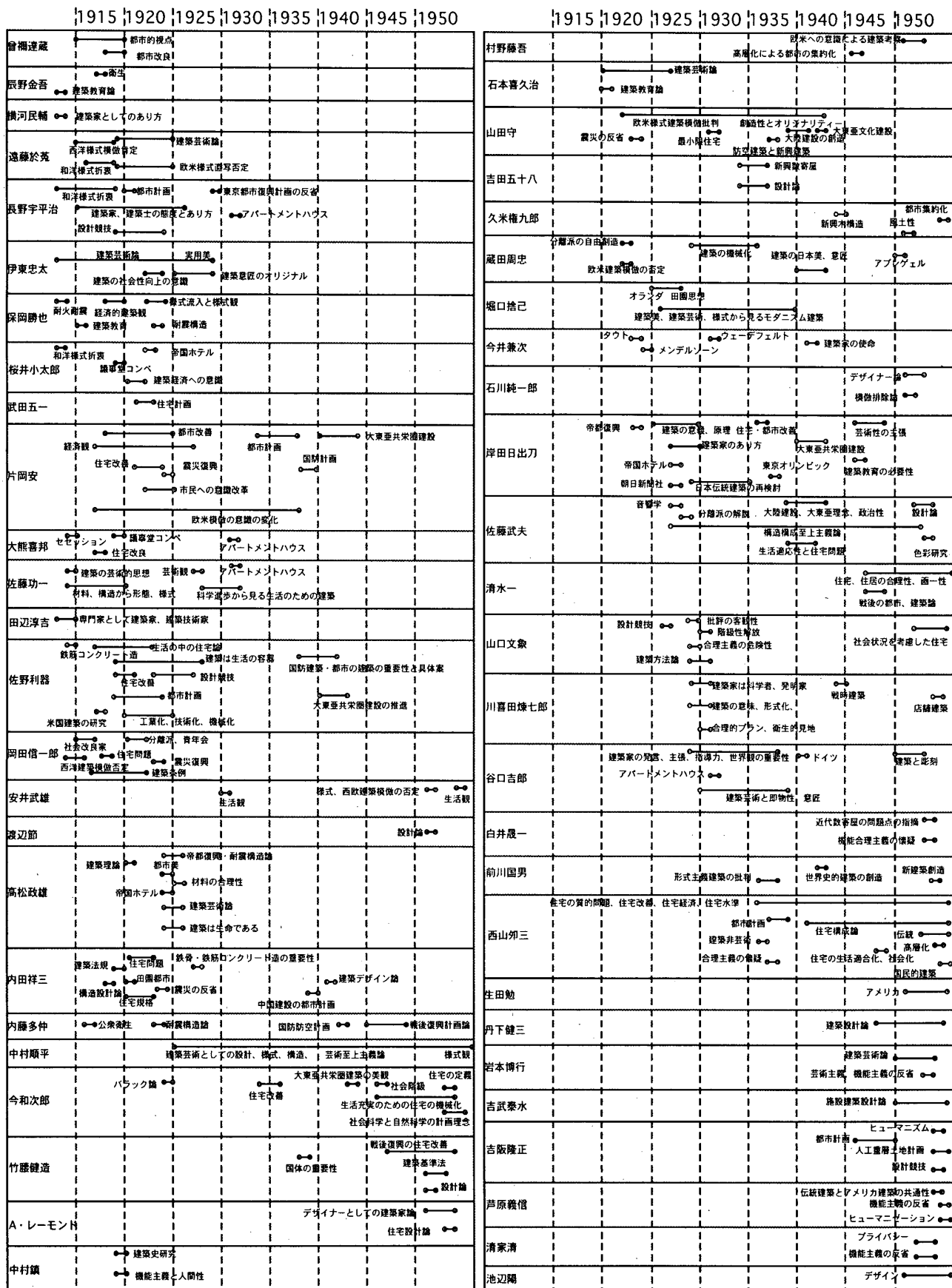


図-1 建築家ごとにみる主要テーマの変遷

- \*1 名古屋工業大学助手・修士 (工学)  
 \*2 伊藤建築設計事務所・修士 (工学)  
 \*3 久米設計・博士 (工学)  
 \*5 名古屋工業大学教授・工学博士

Research Assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
 Ito Architects & Engineers inc., Master Eng.  
 Kume Sekkei, Dr. Eng.  
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.